

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ミュージアムという居場所

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川口, 幸也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4322

ミュージアムという居場所

川口 幸也

1 ミュージアムの時代

フランスの美術史家であり、戦後、ルーヴル美術館の絵画担当学芸員として一時代を画したジェルマン・バザンはかつて『ミュージアムの時代』の中で、ヨーロッパの一九世紀において「ミュージアムは拡大し、取るに足らないものも含めて人間生活のあらゆる産物を網羅する」ようになったと書いた(Germain Bazin, *The Museum Age*, Universe Books Inc., NY, 1967, p.195)。周知のように、その後二〇世紀を経てもミュージアムの勢いはとどまるところを知らず、二一世紀の今日では、ヨーロッパ、アメリカをはるかに越えて、アジア、アフリカ、中南米、オセアニアなど世界じゅうに広がっている。

たしかに、いまや地球上のすみずみにまで及びつつあるミュージアム文化であるが、それだけに一つ

ひとつをじっくり観察してみると、ミュージアムといっても多様であり、とくに非西洋圏に現れたミュージアムの中には、本来西洋の近代史の中で語られてきたミュージアムのイメージとはかなりかけ離れたものも散見される。本稿では、そうしたミュージアムの具体例をいくつか採り上げながら、現代においてミュージアムなるものがどのような場として要請されているのかをもう一度考えてみたい。

2 タイの地域博物館

二〇〇五年六月、私はタイを訪れ、首都バンコックの主だったミュージアムのほか、最近になって地方に造られた小さなミュージアムのいくつかを調査する機会を得た。その一つ、バンコックから車でほぼ西に向かって三時間ほど走った海辺にある小さな漁村で見た地域博物館のことを話題にしたい。

マレー半島の付け根の東側に、イサンという名の村がある。この村の一角に、二〇〇メートル四方ほどの土の地肌をさらけ出した空き地があり、そこに、鎮守の杜のような茂みを背にして木造二階建ての博物館が建っている。博物館の名前はバン・カオ・イサン地域博物館 (Ban Khao Yang Local Museum)、一九九六年に、村人たちの寄付を基に政府の後押しを受けて設立された、まだ発足して間もない博物館である。少し離れて見るとそれは、日本の小学校の校庭のかたわらにタイ風の仏教寺院が建っているとあった風情だ。

建物の一階には民具の展示コーナーと事務所、および簡単な収蔵庫があり、二階部分が板の間の展示室になっている。展示室の広さは小学校の教室にして二つ分ぐらいだろうか。中に入ってみると、その

昔、近くの海で難破した中国船の生き残りの人々がこの村を開いたという言い伝えを裏付ける遺跡の写真や、そこから掘り出された中国製陶磁器の破片、村を取り巻く地勢の特徴や地誌を示す写真とグラフ、それに仏塔や仏像の石彫レリーフなどが、パネルに貼られたりガラスケースに収められたりして、整然と展示されている。ディスプレイとしては必ずしも洗練されているとは言えないが、それでも歴とした博物館の展示である。

とはいえ、このイサン地域博物館には、欧米や日本のミュージアムとは少々違うところがある。それは、展示室の一番奥に高さ約二メートル半のわりと大きな仏像が置かれていて、地元の人が時々そこにお参りに来るといふ点である。仏教の教えを絵で説いた絵巻も、すぐわきの壁には貼られている。私が滞在したほんの短い間にも、三〇歳前後の男が一人でやって来て、香を焚きながら静かに仏像を拝んでいた。地域の博物館は、見た目だけではなく実際にお寺の役割を果たしているのだが、それも道理で、この博物館、じつはもとはお寺なのである。

外に出て博物館の前に広がる広場を少し歩くと、川が流れており、下流の方を見やると、すぐ向こうが海だとわかる。川の兩岸はびっしりとマングローブの森に覆われている。その川に面して田舎風の食堂とお土産ショップがある。ためしに昼食を食べてみると、出てきたタイ料理は地元の海や川の幸をふんだんに使ったまことにおいしいものだった。

聞けば、週末には都会からの観光客や地元の家連れがやってきては日なな一日たっぷり時間をかけて食事とおしゃべりを楽しんでいくらしい。私がいた間も、数人の家連れがビールを飲みながら盛り

上がっていた。目の前の広場ではまた、定期的に市が立ち、時節が来ると祭りも催されるのだという。お祭りのときには村じゅうの人がここに集まって来るのだろう。

タイでは一九八〇年代後半からの急速な経済成長に伴い、若者を中心に多くの人々が都会へ移り住み、そのため近年では、昔ながらの地域の共同体が存続の危機に瀕しているのだという。そうした状況に歯止めをかけるべく、政府は一九九〇年代に入って、このような地域博物館の設立をあちこちの村や町に働きかけた。その狙いは、個々の地域の歴史や文化の保存継承と、観光資源の整備を通じた地域経済の活性化である。といっても、何もないところにいきなり博物館をとというのは無理な相談だ。そこで目を付けられたのが、古くから人々に親しまれてきた地元のお寺であった。お寺なら展示室に使える広間も展示品も揃っている。タイの地域博物館の多くがお寺に併設、もしくはお寺そのものであるのは、このせいである。

けれども、かえって、そのことが功を奏しているように私には見えた。つまり、タイの地域博物館は、寺とミュージアムを兼ねることによって、単にその地域の歴史や風土に関する知識や情報を伝え広める場であるだけではなく、人々の憩いの場であり、互いの絆を確かめ合う豊かな空間にもなっているのである。

だが、こうした地域博物館のあり方は、彼らを指導する立場にあるバンコックの大学の専門家にはあまり評判がよろしくない（たとえばシルパコーン大学附属シリントン王女人類学センター〔一九九一年設立〕では、国内各地の博物館を専門的な学術の面で支援すると同時に、各博物館のデータベースも作成している）。専門家たちの多

くは欧米仕込みであり、彼らにすれば、ミュージアムとは本来、宗教と科学の分離を前提に、もっぱら知と美の啓蒙の場であるべきなのであつて、そんな欧米型のミュージアムの理念に照らしてみれば、タイの地域博物館はその名に値しないということになるようだ。もちろん、西洋風の鉄筋コンクリート造りのモダンなミュージアムも大都市に行けばちゃんと存在している。私は実際にアユタヤでそのうちの一つ、アユタヤ歴史研究センター博物館を訪ねてみたが、皮肉なことに、観光客と学校の団体を除くと、地元の人たちが気軽に来ているようには見えなかった。

以上のようなタイのミュージアムをめぐる状況は、他の国ではどうなのだろうか。次に、もう一つの例としてインドの場合をのぞいてみよう。

3 インド——遺跡という名の野外ミュージアム

インドでは、大都市へ行けば必ず立派な博物館、美術館がある。たとえば首都ニューデリーには国立の博物館、近代美術館、それに工芸美術館、科学博物館、このほかガンジーやネルーの記念館など大小さまざまなミュージアムがあり、しかも展示内容はおおむね先進国のミュージアムと比べても遜色ない。しかしながら、それらのミュージアムを訪れるのは、大半が観光客、それも外国からの観光客である。もちろん、数から言えば多くはないが、近代美術館などでは熱心なインド人の美術愛好家もいるので一概に決めつけることはできないが。

ただ、インドには、都市と言わず農村と言わず、いたるところにそうしたミュージアム以外にヒンズー

教やイスラム教の古い寺院やかつての王の廟墓、あるいは史跡がある。ニューデリーだけを取ってみても、ジャーマ・マスジッド、クトゥブ・ミナール、フエマン廟、レッド・フォートなどなど、市内のあちこちに、見るからに歴史の重みと風格を漂わせた古刹や遺跡が散在している。そして、それらはどれも、やはり外国人を主とする観光客でにぎわっているのだが、同時に、散歩やハイキング、クリケットなどのスポーツに興じる地元の家族連れや友人たち、あるいはデートを楽しむ恋人たちにも親しまれているのである。

言うまでもないが、彼らはとくに何かを学ぼうとしてやって来るのではない。日々の暮らしの中でくつろぎや安らぎを求めて、そうした寺院や遺跡を訪ねているだけなのだ。そこでは博物館や美術館と違って細かな規則はなく、語らうことはもとより、野外であれば飲んだり食べたりも原則自由である。だから何度も繰り返し訪ねるリピーターが多い。インドではミュージアムも遺跡も多くの場合、国民向けの入場料金は格安に設定されていて、利用しやすいことも追い風になっている。その結果、単なる癒しや息抜きが目的でも、彼らはいつしかごく自然に、寺院や遺跡に降り積もっている歴史のオーラに全身を曝しているのではないだろうか。半ば無理やりににわか仕込みで詰め込んだ知識とは違って、そうして体に刻みこまれた記憶や経験は一生忘れることがないだろう。

こうしてみると、インドの街なかにあふれるこれらの寺院や遺跡は、名前こそミュージアムとは名乗っていないが、事実上ミュージアムとしての役割を果たしているのではないだろうか。むしろ、インドの風景の中になじみ、人々の暮らしの隅々にまで溶け込んでいる分だけ、いわゆるミュージアムよりもは

るかに効果的にその機能を果たしていると言えるかもしれない。

4 変容する欧米のミュージアム

そもそも西洋近代におけるミュージアムとは、学校や大学、図書館、出版などと同じく啓蒙のメディアである。平たく言えば、ただ来て、語らったり飲んだり食べたりする場ではなく、なにがしかを学ぶことが期待されている場である。そうした西洋近代の原則的なミュージアム観から言うと、すでに見たタイの地域博物館やインドの寺院、遺跡の類はあきらかにミュージアムの枠からはずれている。そこで、では当のヨーロッパやアメリカではミュージアムの利用の実態は現在どうなっているのだろうか。このことを簡単に見ておきたい。

西暦二〇〇〇年を挟むこの一〇年来の欧米におけるミュージアムの新增設とそれに伴う存在感の膨張ぶりは目に見張るものがある。ロンドンもその例外ではない。大英博物館はグレート・コートを増設したし、テムズ川沿いには一帯の再開発プロジェクトの一環として元の発電所をあらたにテート・モダンとして整備した。また、サウス・ケンジントンのヴィクトリア&アルバート美術館(V&A)でも、二〇〇〇年以後逐次、館内各部門の改装を進めており、作業は現在も進行中である。

こうした新しく改装、整備されたミュージアムに行くと、明らかに従来のミュージアムとは違っていることに気づく。それは、まず第一にガラスの天井や壁面を導入することにより、それまで保存上の理由からタブーとされがちだった外光を大胆に採り入れて館内が明るくなっていることである。ついで、

これに合わせて、展示空間とは別にレストラン、カフェ、ミュージアム・ショップが大きく、中心的な場所を与えられており、そこで供されるサーヴィスも片手間ではなく、本格的なのである。加えて、これらの空間は無料で利用できる（大英博物館、V & Aでは常設展は無料である）。したがって、週末になると、家族連れや若者たちが、展示の観覧もほどほどに、これらのレストランやカフェ、ショップでほとんど半日近くを過ごしているのを見かけることもまれではない。現に、大英博物館のグレート・コートは、表向きはライブラリーを中心に据えているとはいえ、実際にはカフェとレストラン、ショップの空間であり、テート・モダンの一階部分のレストランやショップも、周辺のテムズ川河畔をレジャー・ゾーンとして再開発しようとするプロジェクトと見事に呼応している。かくて、以前ならデパートや遊園地、あるいは郊外のショッピング・センターに出かけていたであろう人たちが、ミュージアムに足を運んでいるのである。なるほど、同じ週末を家族や友人と過ごすのなら、デパートやショッピング・センターよりもミュージアムの方が、無駄な出費はしないし、いくぶんかはタメにもなる。だから、理にかなった選択だと言えるのかもしれない。

こうしたミュージアムの使われ方は、先に述べた近代のミュージアムをめぐる教科書的な記述とは少々様相を異にするものである。啓蒙のメディアと言うよりは、いささか気晴らしや消費に傾きすぎているかもしれない。だが、現代の都市に生きる人々の数少ない安らぎの空間としての役割を果たしていると考えれば、新しいミュージアムの可能性を切り拓くものとしてむしろ肯定的に見るべきではないのだろうか。

この欧米におけるミュージアムの新しい流れの先駆けとなったのはおそらく一九七〇年代に開館したパリのポンピドゥ・センターであり、弾みをつけたのがオルセー美術館やガラスのピラミッドの増設によつて大変身を遂げたルーヴル美術館であつたと思われる。周知のように、ポンピドゥ・センターの最上階にあるレストランからはパリ市内が一望でき、また館全体としても周辺の高層ビルと一体になつて独特の祝祭的雰囲気醸し出している。さらにオルセー美術館にはカフェのほかに格調の高いフランス料理のレストランがあり、ルーヴルにいたつては、カフェやレストラン、ショッピング・ゾーンが一つの街を作っているかのような趣きさえ漂わせている。

同じような傾向は、アメリカや日本でも見ることができ、ニューヨークのメトロポリタン美術館では週末になるとロビーにピアノの生演奏が響きわたり、少しだけおしゃべりして遅い昼食を楽しむ市民で溢れかえるし、セントラル・パークの反対側にある自然史博物館は一日を展示室やカフェで過ごす家族連れの姿で一杯になる。日本でも、この数年のうちにオープンした二、三の美術館を訪ねてみれば一目瞭然である。

月並みな言い方だが、ミュージアムの敷居は以前に比べるとずいぶん低くなつてきているのだ。いまやそこでは、食ぶるとか買う、あるいはおしゃべりをするという日常的な営みが、展覧会を見てながしかを学ぶという行為に従属することをやめて、独自の意義を主張し始めているのである。

5 ミュージアムという居場所

ミュージアムはしばしば教会や神殿に例えられてきた。たとえば冒頭に挙げたジェルマン・バザンは、同じ本の中で次のように言っている。「ミュージアムは現代の人間に、時間が宙吊りになった寺院(テンブル)、つまり、東の間神が顕現する場を、文化を通して提供している」(Germain Bazin, *op. cit.*, p. 1)。ただし、その場合、教会や神殿は克服されるべき過去の遺制として参照されることが少なくなかった(たとえば次を参照。Duncan Cameron, "The Museum: A Temple or the Forum", *Curator*, 14 (1), 1971)。すなわち、ミュージアムは、聖と俗が分かれた近代、言いかえると神なき時代であって、かつての教会の役割を代替しているが、しかし、教会や神殿が神の栄光と権威を謳いあげる場であったのに対し、ミュージアムは、宗教から解放された科学に基づく真理と美を体現し、人々に広く伝え、たがいに共有する場であるべきだと、それらは言うのである。

たしかに近代のミュージアムは、宗教の持つ権威や権力と袂を分かち、不特定多数の人々を対象に啓蒙の使命を担ってきた。けれども、そういった近代化のプロセスにおいて、一方では失われたものもあつたのではないだろうか。というのは、ヨーロッパの歴史において、教会は、単に信仰の場としての役割を果たしてきただけではなく、それを取り巻く地域の人々の交流の場としての役割をもおおいに担ってきたからである。近代のミュージアムは、宗教や教会の負の側面と決別しようとする過程で、それが持っていたもう一つの側面、すなわち人々の生活や心の紐帯であり抛りどころとしての一面も斬り捨ててしまったのではないだろうか。

このような視点に立つならば、欧米における昨今のミュージアムの変貌は、一方で消費資本主義に足

元を擁われているという批判的な見方もできるのかもしれないが、他方では本来ミュージアムが担うべきであつた社会の結節点としての働きを取り戻しつつあると見ることもできるのではないだろうか。

かりにそうだとすると、なによりも私が注目したいのは、ここに挙げた欧米における最新のミュージアムの姿が、タイの地域博物館やインドの古刹や遺跡の姿と重なりあうということなのである。一方的に知や美を伝授しようとしてきた近代のミュージアム像の限界を越えようとして、新しい可能性を模索しながら試行を重ねる欧米の最先端のミュージアムと、ミュージアムという装いをこらしながらも地元の人々の風土や文化に深く根ざしているタイの地域博物館、あるいはミュージアムと名乗ってはいないが、実質的にはそれと同じ働きをしているインドの古い寺院や遺跡、一見すると何の共通点もないこれらが佇たすんでいる場所は、じつは互いにそれほど遠くはないように私には感じられるのである。

二一世紀を迎えた今、これらのミュージアムや遺跡は、啓蒙の装置であると同時に、いやそれよりも前に、人々にとってのただの居場所としての役目を果たしているのである。それはおそらく、今後、世界じゅうのどこであれ、ミュージアムが真つ先に引き受けるべき、より本質的で根源的な役割になっていくのではないだろうか。

【読書案内】

ピエール・ブルデュー『美術愛好——ヨーロッパの美術館と観衆』（山下雅之訳）、木鐸社、一九九四年。

ヨーロッパ社会でアートと美術館が果たしている階級的な機能をフィールドワークに基づいて社会学の立場

から論じた、今や古典といふべき名著。平和と平等を希求する戦後の日本人には少しほろ苦いかも。

Carol Duncan, *Civilizing Rituals: Inside Public Art Museums*, Routledge, 1995.

こと世評とは違い、美術館なるものの内幕がいかに俗っぽくていかかわしいかを、ニューヨークの近代美術館やワシントンのナショナル・ギャラリーをはじめとする欧米の名だたる美術館を例にして実証的に論じた本。